

衆院選「とりあえずの感想」

4年ぶりとなった第49回衆院選が終わった。昨年の11月1日は、大阪市廃止の是非を問う住民投票がコロナ禍で強行され、大阪市存続の決定に歓喜した。今回の衆院選は、何ともやり切れない思いで1日の朝を迎えた。私なりに衆院選の結果を検証していくが、衝撃の冷めないうちに、とりあえずの感想・コメントを記録しておきたい。

まず第1に、自民党は議席を減らしたものの、単独過半数を維持した。公明党と合わせて、与党で絶対安定多数を確保した。コロナ禍の失政や不祥事、強権的な政権運営にも関わらず、なぜ自民党は単独過半数を維持できたのか。地方圏などに強力な選挙地盤をもち、小選挙区を中心に議席を重ねていった。それと総裁選では、連日テレビなどで自民党「露出」が続いたことも、選挙結果に大きく影響したのではないかと。マスコミ報道の検証・評価も求められる。

第2に、野党共闘の評価、とりわけ立憲民主党が公示前の議席数を減らしたことだ。野党5党は小選挙区の7割超で候補者を一本化して、多くの選挙区で接戦に持ち込んだ。選挙区ごとに分析する必要があるが、市民と野党が共闘して「政権交代」に挑む初めての選挙として一定の成果はあった。ただし「選挙が近づいてやっと候補者を調整する従来の手法から脱し、早い段階で骨太の共通政策を練らなければ、いずれ有権者からあきられるのではないか」(毎日1日朝刊)という指摘は、今回にもあてはまるのではないかと。野党のなかでも立憲民主党と共産党は、選挙のための「数合わせ」といった批判に応えるためにも、政策面でも早い段階からシビアな協議が求められる。

第3に、日本維新の会の躍進である。なかでも大阪の19小選挙区では、維新が15、公明が4という結果になった。自民の当選はゼロとなった。維新は近畿をはじめ、比例区でも議席を増やし、公示前の4倍近い勢力となった。「自民、公明両党と、共闘した野党が政権の枠組みを巡って批判の応酬にかまけるうちに、「第三極」を自任する日本維新の会が大きく支持を伸ばした。与野党どちらにも共感できない有権者は少なくなかったと言える」(毎日1日)という指摘をどう考えるか。この衝撃的な結果をどうみるか。1日の大阪日日は次のように解説する。「維新躍進の秘密は何か? 既得権益打破を旗印に、一部では自民より保守的体質を抱えながらも、大阪では国会議員や府知事だけでなく、府議や衛星都市の首長や議員を選挙のたびに着実に増やし続け集票マシンとして機能するピラミッド底辺を地道に広げてきた。」こうした集票マシンやごまかしの宣伝、マスコミの維新「迎合」だけでなく、維新という政党が支持される政治・経済、足もとの地域の構造などの分析が求められる。私も「課題」としていきたい。

衆院選とりあえずの感想・コメントを書いてきたが、維新が躍進したことで危惧していることだけ指摘しておく。安倍・菅政権を継承する岸田政権に対し、維新が「大軍拡」や改憲をけしかけることだ。日本維新の会という政党の動きを今後も注視したい。

(2021年11月2日)